
逢いたい。

あやひこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
逢いたい。

【Nコード】
N9156A

【作者名】
あやひこ

【あらすじ】
逢いたいあの人に向けたメッセージ

第1話 逢いたい

いつも思い出すのはあいつの事。

あの時なんで自分に素直になれなかったんだろう。

戻りたい。

戻りたい。

戻りたい。

今の生活なくすことになってもあいつに逢いたい。

あいつに抱き締めてほしい。触ってほしい。キスしてほしい。

最後にみたあいつは他の女に膝枕してもらってた。

なんで！なんであたしじゃないの？

今も思い出すのはあいつに恋してた片思いの日々。

戻りたい。

そしてあの女より先にあいつに好きって言おうよ。

だってこんなつらい思いしたまま一生過ごすなんて耐えられない。

あの時の自分にうそはつかないでって言いたい。

あいつの事今も好きなの。苦しいくらいに。

第2話出会い。

高2のクラスにあいつは居た。

「ちよつとーヒコどうにかしてよー」

後ろの席のちひろちゃんは隣の席の男の子にからかわれていた。

その男の子こそあたしがのちに逢いたいと切なく思う彼、高木綾である。

綾はちひろちゃんと一年生の時同じクラスで仲がいいみたいだった。その時はじめて彼を認識した。クラスメートとして。あたしはニコニコしながら（たぶん）振り向いた。斜め後ろの席に綾はいた。

窓側の後ろから2番目、外の景色に負けなくらいキラキラした笑顔で一瞬あたしを見た。

「さっきの小テストみせろってうるさいのおー」

まあ、前に座ってんだからおおまかな流れは知ってた。

「いーじゃん、そんなにやばいの？」

綾はそれでもあきらめ無い様子で言った。

「したらみんなセーノでだすべ？」

これあたしなりの解決策。結果、

綾 23点

ちひろ 18点

あたし 27点

ばかさかげんを三人で繰り広げ爆笑。

「俺、小田倉さんでもっと頭いいと思ってた。」

ごもっともな意見ありがとう。確かにあたしはこのクラス内では総合で二番か三番くらいの成績だが小テストごときに事前に勉強はしない怠け者です。見た目で判断ご苦労様です。

「あたしも高木君ってもっと賢いって思ってた。」

「ねえヒコ思っただけけど今授業中じゃね？」

「おまえらの馬鹿さかげんはみんなに伝わったから授業始めていい

か？」

数学の小野の一声に我にかえる三人。

、、とまあこんな感じで私達は知り合う事になった。

第3話気になる。

「小田倉さんってバスケ部？」

ある日突然急に話かけられる。もちろん綾に。

「はい、そうです。」

と、礼儀正しく返事するしあたし。

「A組に井上っていんじゃない？あれもバスケ部だよね？」

「はい。」

「実は寮が同じで小田倉さんの事リサーチしちゃった。」

、、リサーチ？

「実は天然全開なんですよ？」

「は？」

本人は一生懸命生きてるのに天然言われてああそうですって言う人いないとおもうんですけど。

「まあいいや。とにかくよろしくね。」

「はっはあ、、」

「いのちゃん！！高木くんと何話したの！？」

放課後部活で井上こといのちゃんに尋問開始。

「え？ただ聞かれたからおもしろー奴だよって言ったただだよ？」

「だって今日いきなり天然でしょって言われた！意味不明だし！」

「、、天然なんだよおまえ、、自覚してないだけで。」

と言うといのちゃんはシュート練習しはじめた。

いのちゃんにか隠してる気がする。

、、ああ今日ものちゃんシュート素敵に決まっていますね。

さすが中学でエースだっただけあるよ。だって追っかけの子達かなりきつい視線であたしの事みてるもん。こんな事に気が付くあたし

は天然なんかじゃないと思うんだよね。いのちゃんは背高いし顔もいけてるしバスケットうまいし男の子と話すの苦手なあたしでもうまく話せるしなんかスーパーマンって感じた。

「おい女バス！さぼってねえでやれ！！」

そして喝の入れ方も超一流。

「はいはい。」

「んだコラ？やる気あんのか！」

「いのっちやめて。女バス三人しかいないんだから男バスと違ってお遊び部なの。しかも今うちら二人しか居ないじゃんバスケット部。」

「いや他の奴ら女とかよ、いろいろあんじゃねえの？」

「いのちゃんは？浮いた話聞かないね。こんなにとりまきがいるのに。」

「とりまき言うなかわいそうだろ。あいつらなりにがんばってんだから。」

結局今日はなんかわからないまま終わったな。高木くんいのちゃんからなに聞いてああ言ったんだろう？気になる17才春。

第4話地雷

「あれっ早いね今日。」

学校着くなり教室には綾がいた。綾はサッカー部だから朝レンがあつて教室に着くのも早いのだ。あたしはバスの時間の都合上早く来るしかないのだ。

「高木くんも早いね。」

「俺？部活朝あつからね。」

「サッカー何処守ってんの？」

「俺？補欠。足怪我しちって。あんま無理できないんだよね。」

「やべっ傷に触れた？あたし？」

「ははっやっぱ小田倉さんっていいね。」

その日一日そのいいねって言葉がどういう意味なのか、どういう意味でも嬉しくって授業どころじゃなかった。明日も早く着いたら少し話せるかな？あたしは綾と話するのが楽しみになっていた。

「いのちゃん、今日ね高木君と話したんだ。ちょっと地雷踏んじやったかも。」

放課後いつもどおりバスケの練習（という名のバス待つまでの時間潰し）してる時いつもどおりいのちゃんとおしゃべりタイム開始。

「地雷？あいつなんか傷あったっけ？」

「あのさ足怪我してメンバー入り出来ないんでしょ？」

「ああそれか。あいつなにげにサッカー推薦で高校入ってるから怪我した時かなりきまづかったなあ。あいつその事話したんだ。へー以外。」

バスケットボールをくるくる人差し指で回しながらいのちゃんはへ

「へーとずっと言ってた。あたしの知らない綾が沢山存在するんだなあって思った一日だった。」

「おはよ、小田倉さん。」

次の日も次の日も毎朝こうやってあいさつしてお互いの事少しずつ話して知っていったんだ。

第5話好きな人。

ある連休にクラスメートの仲いい四人で遊園地に行く事になった。コロコロした体型で可愛いとは言えない沙也夏と綾との出会いをくれたひろちゃん、あたしより控えめで男の子と話しているとこ見たことないナツキちゃんとあたしで。

遊園地近くの駅までバスで二時間。ひろちゃんとナツキちゃん、あたしと沙也夏で座る事になった。初め楽しく四人で話してたけど次第に二人で話すようになってネタも尽きた頃沙也夏から

「ヒコって好きな人いるの？」

突然聞かれた。

沙也夏とは二年になってからの付き合いで、、つか二年のクラス替えであたしは一年の時同じクラスだった女子が一人もないクラスになった。だから他の二人とも深く仲がいいわけじゃないんだ沙也夏はナツキちゃんと仲良くてまあ一緒にいるんだけどあんまりあたしの友達にいたタイプではない。

「なんで？」

「好きな人お互いバラしあいっこしない？」

今思えばここであたしが口を割らなければもっと違う未来が訪れたのかもしれない。でもそんな事知らないあたしは綾の事が最近気になってはいたけれどとりあえず今まで好きかなあって思ってた

「横浜君かなあ？」

って答えた。沙也夏はその返事に少し安堵の表情を浮かべ

「あたし高木が好きなんだ。協力するから協力してね。」

その時は綾の事好きっていう範囲に居なかったから

「いいよ。」

って答えた。

過去のあたし！！そいつは悪魔だぞ！！なんて今更もう遅いけどね。変えられるならあの一言変えてって神様に言いたいよ。

第6話ドキドキ

「小田倉さんこの問題わかる？」

あの一件以来なんとなく綾と話しちゃいけないんじゃないかって思っちゃってうまく話せないんだ。

「うっうん、。」

たぶん綾もなんか変って感じてるんじゃないかな？

「ここはねこうやってさ、。」

「ふううーん。ありがと、。」

だって必要以上に話すすめようとしないもん。

「いい表すなら肩身が狭いって感じだよー。」

「ヒコは綾に話かけられるのが辛いの？」

「ずばりそうとはいいきれないんだよねえー」

「、、、と言うと？」

「あたし高木君に話かけられて嬉しいって感じてる部分があっても高木君と話してると楽しいんだ。」

「へー。」

と言いながらいのちゃんはバスケットボールを人差し指で回しながら何か考えてるみたいだった。

部活終わって忘れ物取りに教室に戻った。綾が居た。

「あれっ？今帰り？」

「うっうん。忘れ物取りに、。あっ着替え？あたし少しでてるから終わったら教えてよ。」

「ほーれほーれこっちこっち。」

ぱんぱんと手を鳴らし飼ってる飼犬を呼ぶみたいに綾はあたしを呼んだ。そのノリにあたしも

「ワン！」

ってつい、のっちゃって広げる腕の中に吸い込まれていった。

あたしたちは数秒抱き合った。胸がどきんどきんしてる。あたしにこんな勇氣あったなんて、。意外。綾もドキドキしてるみたい。

「ごめん！悪ふざけしすぎたね！」

そういつてあたしは忘れ物を忘れて駆け足でバスまで走った。

もうまともに綾の顔みれないじゃん！！あーびっくりした！

第7話嫉妬。

次の朝 教室に綾の姿はなかった。当たり前か。あんな事あった次の日だもんね、気を使ってるんだね。

クラスメートのほとんどが集まった頃綾は登校してきた。綾は目を合わせる事なくガタンと着席した。どことなく荒い感じで。

一日綾と話す事はなかった。後ろに綾が居るって考えると振り向けない。険悪なムードが、、。昨日あんなにいい感じだったのになんで今日はこんななの？

「何でこんな風になっちゃったんだろ、、。」

「、、、俺さ昨日、、。」

「え？」

人差し指ではクルクルとバスケットボールが回っている。

「綾にうざいって言ってたっていつちゃったんだ。ごめん。」

回転が止まりバスケットボールがボンボンと床に落ちた。

「あっそうなんだ。」

だから綾は、、。あたし最悪だ。

「俺さ綾におまえの事聞かれたとき確かに純粋な気持ちで話したんだ。」

いのちゃんが悪いわけじゃない。だけど、、。

「綾日に日におまえの事話すんだよ俺に、しかも俺の知らないおまえまでこんな短期間で話すんだよ。」

あたしもうここに居たくない。今までいこごちの良かったこの空間が今はもうあたしの居場所がないみたいな感じ。

「おまえ知ってた？俺おまえの事好きなんだぜ、わらっちゃうだろ？」

うつむいていのちゃんは無理して笑ってるみたい。

「笑えないよ、いのちゃんあたし、ごめんねこんなに苦しめて。無神経で。馬鹿で。」

いのちゃんの肩が小刻みに震えてる。泣いてるの？ねえ、泣いてるの？

「かつこわりーな俺。すぐいつもの俺に戻るからよ。ちょっと気持ちの整理つくまでかかるかも。」

はにかみながらうつすら涙を溜めているいのちゃんにける言葉もなくうなずきあたしは帰った。

第8話絶望的

そうして綾に避けられた日々が続きバレンタインがやってきた。

「協力してくれるでしょ？」

沙也夏だ。綾に告白する計画を立てているらしい。こんなあたしだけれどお役にたてるならと返事をした。

見てる感じ綾と付き合う可能性がなく見えたからだ。本当はこんなことしたくないのに苦しくて苦しくてたまらない。あたし綾が好きなんだ、。もっと早くにこの気持ちに気付いていたら沙也夏に協力せずに済んだかな？ 本当にあたし馬鹿なんだなあ、。

「ありがとう。」

これが沙也夏との最後の会話となった。

数日後ナツキちゃんから沙也夏がいつこ下の学年の子と付き合い始めた事を聞いた。実際知らない子とイチャイチャしてる姿も見た。バレンタインで二人に告白したとうわさで聞いた。

許せなかった。顔みるだけで殴りたくなった。結局告白して綾に振られ、その後その後輩にチョコを渡しうまかったわけだ。

向こうも目を合わせることはなかった。沙也夏との絶交を意味していた。そして沙也夏と綾の間でキューピット役をしていたナツキちゃんがこの頃から綾と親密になっていった。

毎日楽しそうにおしゃべりをする姿をあたしは否応なく見せ付けられた。あたしはただだじつと我慢して気持ち押さえて日々を過ごすしかなかった。

三年生になるころ綾とナツキちゃんはくつついた。ナツキちゃんに膝枕してもらい

「俺おまえとどう付き合っていくかなあ。」

と言っている綾を見てしまった。

ショックで泣く事も出来ずそれからは受験勉強に打ち込み綾への気持ちを抱きしめたまま卒業を迎えた。

第9話それから

その後あたしはこの気持ちを胸にしまい込み考えないようにしていく
つもの年を重ねていった。

ある時綾とナツキちゃんがもう時期結婚すると聞いた。押さえられない情熱がふつふつと沸き上がるのを感じた。だけどどうにもならないこの感情をまたあたしはしまいこんだ。

いくつもの年がすぎあたしは半ばやけになるように結婚し子供を生んだ。そしてまたいくつもの年を重ねた。

ピロピロリーン

ある日途絶えていたクラスメートから連絡がはいった。

「もしもし？あたしちひろおー。明日みんなで逢うんだけど来ない？」

それは八年ぶりの連絡だった。

「ヒコひさしぶりい。元気してたあ？」

八年ぶりにあの三人と再開した。

ちひろちゃんは短大を卒業し事務をしている。その誰にも屈しない態度がこうを評しみんなから可愛がられているようでいっそうぶりっこになっていた。

沙也夏はまだいろんな男に告白しては振られの人生で今だに己がわかっていないようだった。

「職場の合コンでいい人いたんだけどさあ」
みんな苦笑いを浮かべていた。

「なんかヒコきれいになったね。」

ナツキちゃんはやはりおとなしめに純情なところが感じられた。その後のナツキちゃんの進展が気になっていたが話は仕事や昔話やですぐにいった。

あたしはもうみんな許していた。恋に必死だった沙也夏も土壇場で裏切ったナツキちゃんも。

「ヒコに誤らないと。」

話も尽きた頃沙也夏が言った。大切な事最後に言うの変わってないなあと思った。

「あたしあの時綾と一個下二人に告白したんだ。協力してなんて頼んだのにごめんね。」

少し間が空き

「私沙也夏の男に手出してごめんね。結局別れたけどさ。」

「みんななに言ってんのぉー？ あたしだけ蚊帳の外だったんじゃない！」

ちひろちゃんのこの一言であたしたちはまた逢う事を約束し別れた。

この時あたしのしまっていた感情が完全に爆発した。

第10話さよなら

あたしは旦那に子供を託し車を走らせていた。

綾は今ペットショップで働いているらしい。偶然のふりして逢いに行こうと思う。

今更だけどうしても逢いたいのだ。このもやもやした気持ちを綾に会ってすっきりさせたいのだ。もっとはやくこうすれば良かったのかもしれない。

道中変わった綾を想像したりなんて声かけたらいいか悩んだりした。でも会えば今考えてる事なんかすっかり忘れちゃうんだろうなとか。

ここかぁ。いるかな綾？ 小さなペットショップだった。道路ぞいの窓には子犬が置かれ外に見えるようになっていた。

車から降りるとその子犬を見て窓をコンコンしたりした。

「見えないの？ 窓に触らないで下さい。子犬がびっくりします。って貼り紙。」

聞いたことのある声。声の方へ向くとあの綾が。

「あ、、。」

髪型も昔と変わらずエプロンをし落ち着きのある面持ちで綾がいる。

「あっすいません！」

「あの、小田倉？」

きづいてくれた。

「、、高田くん？」

逢えた。あたし綾に逢えた。なんか涙でそう。

「なんか久しぶりだね。さっ中入ってよ。ゆっくり話さない？子犬飼うの？」

ニコニコしながら綾は初めて逢ったあの日と同じ笑顔であたしを見ている。

もうダメその胸に飛び込みたい。キスしたい。抱き締めてほしい。思えば思うほど言葉にならない。

「今代理店長してんの俺。誰もいないからてきとーに座ってよ。」

それから昔話をたくさんした。わんさかわんさか思い出がでてきては懐かしく思った。だけどナツキちゃんや沙也夏にはふれず話をした。彼女たちの話をぶり返して傷つくのが嫌だったしそんなくならない話題で今の楽しい雰囲気壊すのが嫌だったからだ。

「ねえ高田くん。今は彼女とかは？」

「いないよ。だって俺結婚したもん。」

「、、ねえキスしてもいい？」

「、、いいよ。」

本当に涙が出そうになった。どういう意味で受けとめてくれたのかわからないけど綾にキスをした。綾のほうからも求めている。抱き合い二人でたくさんキスをした。「好きなの。」

「俺も。」

涙がこぼれ落ちた。

「ずっと好きだったの。」

「俺も。」

またキスをした。体が震える。

「俺ずっとおまえの事こうしたかった。」

結局あたしたちはお互い好きあっていたのだ。自分の気持ちを伝える事ができず今お互いの道を歩み進んでる。

「綾一度でいいから抱いてほしい。そしたらこの胸のもやもやとれるから！」

驚いた。あたし大胆。

「ヒコそれだけはだめだよ。もう俺等は過去なんだから。」

今あたしは車を走らせている。旦那と子供の元へ帰るために。
あたしは今幸せだ。綾に逢ってよかった。綾に出会えてよかった。
本当に今そう思う。
今はとても辛いけどいつかこの気持ちごといい思い出になってくれる日まで、、また心の奥に隠しておこうこの気持ちを。
あたしは今幸せだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9156a/>

逢いたい。

2010年10月29日06時08分発行